

学生を媒介したフィールド・ワークの実践と 地域連携型教育の意義

——富良野地域および東日本震災地域での事例——

天 野 太 郎

1. はじめに

ただいまご紹介にあずかりました、現代社会学部社会システム学科の天野と申します。本日は、どうぞよろしくお願いたします。

さて、本日は「学生を媒介したフィールド・ワークの実践と地域連携型教育の意義」ということでお話をさせていただきますと思います。よろしくお願いたします。

私の所属しているのは現代社会学部社会システム学科の京都学・観光学コースで、地理学を専門にしております。地理学は非常に幅の広い分野ですが、私は文系でございますので、人文地理学、あるいは歴史地理学、あるいはそこから派生して観光のことについても教育・研究に従事しております。

今日は「学生を媒介した地域とのつながり」ということがテーマですので、地域連携型の教育というものをごどのようにやっていきているのか、ということをお話させていただきますと思います。

私は主として3つのテーマで地域連携型の教育を行なっています。まず京都にかかわる歴史地理学的なプログラムをやっております。これは具体的に何かというと、京都の上京区にあります町家を生かして、月に1回のペースで町家講座というものをやっております。築約100年の町家を舞台としまして、学生さんたちとどのような講演会をすればいいのかということも協働しながら、地域活性化のあり方を模索するということがやっております。先々週も行いましたけれども、150回ほどを数えております。とりわけ2016年から京都市が大学と地域を結びつける「学まち連携推進事業プログラム」の採択を

受けておりますので、今は無料で一般市民の方々に集まってきていただいております。

本日参加いただいております学生のうち、東美緒さんがこちらの運営・受付・司会等もやっております。どのような感じで進めているか、少しコメントをいただければと思います。

東 社会システム学科4年の東と申します。私は月1回、この町家講座で受付・運営を行っております。町家講座は40名ほどの一般市民の方に来ていただいて、講師の方の講演を聞いていただくというものになっています。ここの町家講座で、京都の伝統や文化に関することを伝統のある町家で講演するというもので、地域連携型事業となっています。

天野 ありがとうございます。こちらに関して本日は余り深く触れない形になるかと思っております。

次に復興支援関係の活動を通じた教育を行なっています。これは Team. 同女という名前です。2011年の東日本大震災の発生直後から募金活動を行い、5月からは現地に入りまして、学生と協働でさまざまな学びを深めております。これは後ほどパワーポイントで見ていただきたいと思います。

さらに、富良野における地域連携型学習を展開しており、2006年から行っているものです。今日はこの2番目と3番目を中心にお話をさせていただこうと思っておりますので、よろしくお願いたします。

まず、私が地域についてどういうふうと考えているのかということですが、これはアメリカの地理学者でございますが、イーファー・トゥアンという人物がおります。これはトポフィリアという概念を提唱した学者でございますが、場所愛と訳すのかなと思っております。その地域のことを研究するというのは、フィールドワーカーとして外からものを見るわけですけれども、その場所にどだけ

愛情を注ぎ、そして地域に密着して研究していくのか、学習していくのか、教育していくのかということが重要でございます。よくあるのが、少し町に行くだけで「フィールドワーク」という授業名称だったりすることは大学の授業ではありがちです。私の授業でもそういったものがゼロではないのですけれども、果たしてそれを本当の意味で「フィールドワーク」と呼べるのかどうか。やはり地域に密着し、地域の人々の「顔」が見えないと、地域連携型の学習とは言えないのではいかということを前提にお話を進めていきたいと思っています。

2. 富良野における地域連携型学習

富良野地域におきましては、地域連携型の学習を2006年から実施しており、これについてご紹介をしていきたいと思っております。現代社会学部社会システム学科では、インターンシップⅡという授業の枠組みで、観光地域のことを学ぶというプログラムがあり、それがさまざまな要因で対象となる場所が変化し、北海道の富良野でやってはどうかということが学校法人の方からもお話をいただき、現在特任教授でいらっしゃいます河野健男先生によって地域連携授業をスタートしました。しかし、当初は観光がメインだったのですが、観光だけではなく、多角的な学びができるのではないかと、という問題意識も生じ、地域振興への展開を進め、2009年から私が担当しております。

授業の概要をお話ししておきたいと思っております。インターンシップⅡという授業の名目ですと、3年生からしか受講ができません。より多くの学年で受講ができるようにということで、2018年度からプロジェクト演習という科目名称で2年生以上の開講で展開しております。現地学習は7泊8日、事前・事後学習が3日、あとは事後のプレゼンテーションということで、昨年度は講演会1回、学生によって講演会をしております。あと京都市の大学地域サミットで報告させていただき、3月のFDフォーラムで報告をするということで、1年を通して発表を続けるという形式をとっています。準備時間等も含めると、実はこのプロジェクト演習は2単位でございますが、通常最低履修時間は60というのが決まっておりますが、145時間で2単位発行するようにしております。それだけ多くの時間を費やして、地域と向き合うというプログラムです。今年度は応募者28名でございます。面談とGPA選考を行い、17名で7泊8日間富良野に行くというプログラムです。

富良野はどういうところなのかということですが、北

海道の「地理的中心」です。経度・緯度から見て中心なので、「へそのまち」とも呼ばれています。また地域ブランドという点で非常に知名度が高く、わずかに人口が2万人前後であるにもかかわらず、ブランド調査では、函館、京都、札幌、小樽、横浜に次いで全国第6位という知名度を誇る町です。観光で非常に有名ですが、それだけではないということで、今日ご紹介をしていきたいと思っています。

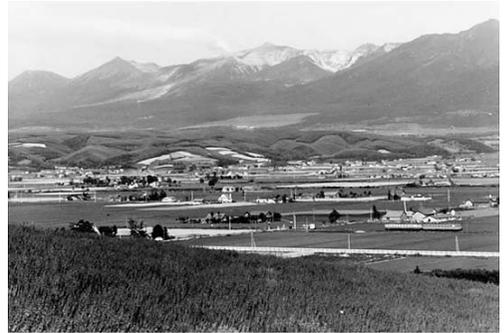


写真1

また、北海道の富良野というのは1970年代まではほとんどの方が知らない場所でした。なぜここが有名になったのかということ、この1枚の写真です(写真1)。これは1976年の国鉄のカレンダーに掲載された写真です。これは国鉄富良野線、北海道で全通した路線としては最も古いものですが、この車両を撮るために、バックは十勝岳、手前が富良野盆地、そしてラベンダー畑が写っています。この紫色の花は何かということが70年代は余り知られていなかったのです。これは何だろう、どこだろうということで、全国の方がこの1枚の写真を通して訪れるようになった。翌年には多くの観光客が訪れるようになったという、非常にトピックス的な場所があります。1枚の写真が大きく地域を変えているという点でも興味深い事例ですが、これも後でお話をしていきたいと思っております。

またさまざまな地域の変化にこの地域はどんなふうに対応しているのか。そしてこの地域では大学がありませんので、大学生がいません。高校生までが一番若い世代で、その次は30代、40代になってしまいます。高校生が中心的に活動しているのですけれども、この富良野地域の中で欠けている大学生の世代のパーツを私たちが提供する。そして地域連携をして学習していく。そのあり方についてお話をしていこうと思っております。

富良野地域は、富良野市が中心で、上富良野町、中富

良野町、南富良野町、それから美瑛町、占冠村、この6市町村を合わせて富良野広域観光圏と呼んでいます。しかも、面積の約30%が現在でも東京大学農学部のカンパスでございませう。もともとこの地域は、東京大学、並びに北海道大学の農学部の演習林として開発され、それが払い下げられてきたという非常に特徴的な地域です。現在でも市街地の南部に東京大学農学部の施設がありますし、東京大学の先生がお住まいです。北海道の中心で札幌までも3時間程度かかるなど、地方都市なのですが、むしろ歴史的にも人的交流という意味において、東京との繋がりがや、アカデミックなムードがあるということです。

私がこの地域で最初に訪れた際に感じたことは、富良野という場所は観光戦略として単機能型、つまりスキーや温泉など何か一つに特化した特徴があるツーリズムではなくて、実は農業を基盤にして展開していることに注目しました。農業がまだ強いんです。多くのグリーンツーリズムの場合、農業が弱くなって別のことの展開や、少子高齢化して別の形で地域振興というのが多いのですが、ここでは今なお農業を基盤としつつ、新しい観光形態を常に持続的に地域の人々が考えているというのが特徴です。

1) グリーンツーリズムとしての富良野

この地域における観光形態は、大きく4つあります。まず1つ目ですが、グリーンツーリズムとしての富良野ということです。環境教育の拠点として、サステイナブルという言葉が非常に盛んに言われております。とりわけ社会科教育、公民科教育において、SDGsといわれる2030年までに17の持続可能な開発の課題を考えようというプログラムが進められております。日本においても2019年度の後半から具体的に推進されていく予定ですが、このサステイナブル、もちろん英語ですけれども、環境問題でサステイナブルという言葉がどこで生まれたかということ、その一つが北海道富良野であるといわれております。北海道の東京大学演習林が林分施業法という方法で植林しているのですけれども、単に杉の木とかをとるだけでなく、針広混交林でございませうが、大きく育った木から計画的に伐採・植林していくというやり方で、それをやっていると森の樹木総量が減らない。とっってもとっっても減らない森ということで、注目されている場所です。さまざまな意味で観光教育の拠点になっておりますので、東京大学の演習林、実は一般の方々には森の中には通常入れないのですが、東京大学農学部の坂上助

教のご協力の下、森林学習プログラムを行っております。

2) 農業を基軸とした観光振興

2番目の地域振興のかたちについてお話をしたいと思います。富良野の農業が強いということですが、最近では6次産業というものが注目されております。ご承知のように農業は1次産業です。製造業は2次産業です。サービス業は3次産業ですが、1+2+3は6であるということで、6次産業化というものを経済産業省などでも推進されております。この北海道の富良野地域でも、農林水産省のパイロット事業がございませうので、こういうものにも触れながら学びを行っております。

富良野という地域の名称は、漢字で富かで良い野原と書きます。私は地理学者でございませうので地名の研究もしているのですが、「野」という地名は本来は耕作面ではよくない場所です。「野」というのは、田にも畑にもならないところが野という地名になります。京都でも、北野とか嵯峨野とか紫野というところは農業に適していない立地であるため、神社やお寺ができたりしてあります。今は観光地になっていませうが、この富良野は非常に土地条件が悪い場所です。十勝岳の山麓で泥炭地であり、これを長期にわたって土地改良をしていくということで文字通りの豊かで良い農業が可能になっていませう。ちなみに富良野というのはアイヌ語でフラヌイから来ていませうが、フラヌイというのは硫黄の臭いがしてくさいという言葉です。アイヌの人々も定住していませうでしたので、内地から入ってきた人々がくさい土地というのは土地の名前にできませうので、富かで良い野原という名前に、漢字を当て字でつけた地名です。本当は悪い場所ではございませうが、現在では「ゆめびりか」という品種の米や、じゃがいも、アスパラガス、メロン、たまねぎなど高品質でさまざまな農作物で代表される農業地域になっていませう。



写真2

この写真2はアスパラ農家ででの学習風景、田井農園というところ。愛知県からここに入ってこられた方が嫁がれて、アスパラ栽培を行っています。実際の農業の厳しさであるとか実態について学びつつ、生産・加工・流通のシステムを学んでいるということです。



写真3

この写真3は上富良野町の多田農園というところ。トムモロコシを採っていますが、こういうものをその場で食べることもできます。実はトムモロコシはどういう食べ方が一番おいしいかという、生で食べるのが一番おいしいのです。こういう形で学生も楽しみながら農業のあり方や作物について学んでいます。多田農園は農林水産省の六次産業化のモデル農場としても知られた場所であり、農業作物をどのように生産・加工・流通し活用できるのかということの授業などを行いました。この農家は現在ワイン醸造農家へと大きく展開しているという点でも注目されています。

またラベンダーについても触れておく必要があります。もちろんこれは富良野地域において一番有名なものですが、もともとは工業製品としてつくられたものです。ラベンダーはフランスの会社が香水の原料として日本で栽培したもので、工業原料です。しかし、1970年代になると合成香料や中国のラベンダーのほうが安いということで、次第に日本そして北海道のラベンダーは売れなくなってしまいます。ほとんどの農家が他の作物に転換していく中、この中富良野町の富田忠雄さんは、ずっとこの斜面のラベンダーだけ残していました(写真4)。



写真4

それが先ほど見ていただきましたように、1976年に国鉄のカレンダーに掲載され、観光客が増えたという場所です。今、ラベンダーといえば富良野ですが、これは偶然に生まれたものだという事です。そういうこともこういうところに書いてあります。

3) コンテンツ・ツーリズムとしての富良野

それから3つ目は、コンテンツ・ツーリズムとしての富良野です。近年は、テレビドラマやアニメの舞台になった場所が地域活性化するという例が非常に多いですが、これをコンテンツ・ツーリズムと呼んでいます。とりわけ富良野では、倉本聡という脚本家の方がここに入り、さまざまな形でドラマをつくっています。1981年からは「北の国から」というドラマが始まり、21年間にわたって放送されているということは皆さんもよくご存じだと思います。もともと倉本聡は東京で脚本家として活躍していましたが、さまざまな事情があり、また仲介する方もいて富良野に来ることになります。それを追いかけてきたフジテレビのプロデューサーの依頼で始めたのが「北の国から」というドラマです。その後も「優しい時間」というのが2005年、さらには「風のガーデン」というドラマも手がけます。これらすべて富良野を舞台としたドラマをいくつも製作することになります。現在もテレビ朝日系列でお昼に帯の「やすらぎの刻〜道」というドラマをされ、今日に至るまでずっと発信し続けておられます。彼は現在も富良野に住み、自分の居所の視点からの景観を多く脚本に書いています。これが一番大きい力となっているように思います。

三島 4年の三島です。

私もここを訪れさせていただいたんですけど、これが先ほど紹介のあった「優しい時間」というドラマに登場

する喫茶店の「森の時計」というところですけど、実際行ってみて、本当にすごい人気で、結構並ばないと入れないようなところで、すごくよかったのは、このカウンターの席がすごく人気で、ここに座ると実際に豆をひかせてもらって、この大きい窓があって、そこから森を見ながらコーヒーが飲めるというので、これが本当にドラマの世界に自分が入ったような体験ができます。このドラマ自体は2005年のドラマですけども、そのドラマの世界が今も続いているなというのをすごく感じられました。

天野 ありがとうございます。寺尾聰という俳優がこの喫茶店のマスターの役ですけども、このL字型のカウンターの一番奥が大竹しのぶが座る席が一番人気だそうで、争奪戦があります。私、この間というか、日曜日に行きましたが、残念ながら誰かに座られてしまって座れませんでした。

このようなテレビドラマや演劇の拠点としての富良野の意義もありますが、ここには公設民営シアターの演劇工場というのがあります。この施設は、実は日本におけるNPO法人の第1号です。NPO法人は日本どこでもありますが、実はこれを日本で初めて導入して、この制度で登録したのはここです。倉本聡が、こういう制度を使って民間から地域を元気にしていかなければいけないということで、地域の活力をいかして推進しています。

4) 高大連携型の教育プログラム

こうした学びも含めながら、近年では高大連携型の教育プログラムに結びつけていきたいと思い、推進しているものがあります。



写真5

写真5は、富良野オムカレーです。カレーにふわふわのオムレツが乗っているのですが、実はこの地域に特徴的な食として指摘することができます。これについても学生さんのほうからコメントいただきたいと思いますが、武元さんからお願いします。

武元 3年の武元瑞季です。

この富良野オムカレーというのは、地元の農業高校で育てた野菜をふんだんに使ったもので、材料となっているタマネギだったり、ジャガイモだったり、牛乳というのは全て富良野でとれたものです。これを全て組み合わせ、地域の一つ一つの産物を組み合わせてオムカレーにしたらどうかと考えたのも、この若い高校生たちの視点があったからこそできたものということで、私たちも実際に高校生たちと一緒につくって食べました。その食と富良野という地域のつながりを学べた、いい経験だと思います。

天野 ありがとうございます。こ富良野緑峰高校が、今から15年前からカレンジャー娘という名前で、正規授業を始めました。初期の段階から私もかかわっております。私はニンジン、私はジャガイモ、私はお米、私は酪農、それで単に農協で売るだけでは付加価値は生まれないので、自分たちの家でつくっているものを全部集めて何ができるか。カレーじゃないか。カレーなら嫌いな人は少ないだろうというので、オムカレーという形でこういうプログラムをつくっています。税抜き1,000円以内など6つの決まりがありまして、レシピをつくってこの富良野地域のホテルやレストランとかで販売します。



写真6

写真6は、2年前の写真です。実際に「北の国から」のセットでも使われていた暮しステーションという場所で実際に市民の方々に食べていただきながら、地域の課題であるとか、そういったことを高校生の方々と一緒に話し合うというプログラムを行っています。

ただ、一方向の交流では面白くありませんので、高校生にも京都に来てもらおうと考えました。双方向型で地域連携していこうということで、毎年EVE祭に富良野オムカレーを提供させていただくこと、これは3回ほど

やらせていただいております。実際に授業に参加していた学生もサポートして、高校生も北海道から富良野オムカレーを作りに来ていただきました。



写真7

これはなかなか難しく、学生支援部長でいらした真鍋先生がおられるので言いにくいのですが、ふわふわのオムレットをつくるのは衛生管理上余り良くないんですね。学生支援課の方がおられるときはかたいオムレットにするんですけども、本当は半熟というか、ギリギリのオムレットにさせていただくのが本来の富良野オムカレーです。その後、高校生と大学生と京都観光などもしながら、4泊5日で高校生にも学んでいただいているという交流型の学習を行っていました。

この北海道の富良野の特徴は何かというと、農業を基盤とした観光のことで、またさまざまな複合的な戦略をとっております。フィルム・ツーリズムであったり、エコツーリズムであったり、食旅だったり、環境教育、それを学生が学ぶ。重要なのは多世代型のツーリズムになっている。写真にはございませんでしたが、中学生や高校生を軸としてアイデアを出して、まちづくりを創出している。これを実際に私たちも協働的に学んでいくということです。これは長期的に持続可能なサステナブル・ツーリズムの形であろうと私のほうで考えているということです。

さらに大切なのは、学んだだけでアウトプットがないとだめだろうということで、幾つかのアウトプットを行っております。まず最終日には、行政関係者や高校生、市民向けに学習成果を発表しております。



写真8



写真9

この写真8は2年前の発表の様子でございますが、このときは約150の方が来ております。教育関係者も来ていただきまして、市議会議員、学校関係者、さまざまな方々から学んだことを発表してご意見をいただく。時には辛辣なご意見をいただくこともございます。

この写真9は昨年の発表風景です。ここではタマリーバという約300名収容できる商業施設のホールがあり、そこで発表してみました。買い物ごてらの方も来られたりして、いろいろな意見をいただくのですが、これに関しても学生さんからコメントをいただければと思います。

山加 4回生の山加詩織と申します。

富良野に行く前から幾つかのグループに分かれて、ある程度テーマを決めて、富良野にいるときには調査をいろいろ進めて、最終日に発表させていただくという形です。私たちも1週間近く滞りしないとわからないこととかもたくさんあったので、調べただけじゃわからないこととかもいろいろ勉強させてもらいましたし、見ている方も、先輩が代々ずつと行っていることなので、いろいろ受け入れてもらう部分もあって、向こうの方も本当に

いろんな意見を出してくださって、すごくいい発表になったといいますか、やっぱり学びを積み重ねていくことが大切になってくるんだなと実感できた発表でした。

以上です。

天野 ありがとうございます。こうした発表を通して、実際、市議会議員の方なんかもこれを政策に生かしていただいて、Wi-Fiの整備であるとか、観光でのインスタグラムの展開とか、そういった具体的な提案、学生の目線からの提案というものも実際のまちづくりに活かしていただいています。



写真 10



写真 11

こうした学生たちの学びは、新聞などのメディアでも取り上げられています。写真 11 は北海道新聞の一面で、同志社女子大学の学生が来て学習し発表しているという形でもご紹介いただいていますし、これは昨年防災の関

係でやったプログラムですけれども、防災とか地域振興の学習、去年北海道でも大きな地震がございましたので、どういうふうな形で学生が活動できるのかということの報告なんかも行いました。

そして、ラジオでもいろいろ活動を行ってまして、ラジオふらのというものがございます。そこで学生の生の声を地域の方に伝えるというプログラムを行っています。これについても武元さんからお願いします。



写真 12

武元 この富良野のコミュニティ FM に私も出演させてもらいました。ラジオの中では富良野での体験学習や、研究報告に向けた学びについてラジオでお話ししました。DJ の方も同志社の卒業生ということもあって、女性の方ですけど、私たちが富良野に実際行って、京都から来た女子大生の視点というのを自分たちの声で直接ラジオを通して届けることができたというのは貴重な体験になりました。

天野 ありがとうございます。真ん中の方が浦田芳穂さんですけども、富良野高校出身で同志社大学社会学部を出られまして、旅行会社で勤務後、地元に戻られラジオふらのを中心に活動され、私たちの同志社女子大学の学びというのを支えていただいております。こういうものがまず1つ目の富良野地域の学びの報告でございます。

3. 被災地域での地域連携型学習

2011年3月11日、東日本大震災が発生した直後から、学生さんたちが何か私たちにできることはないかということで始めたものです。当初は宗教部で募金をしたらということで、ボランティアセンターなんかも今はありますけれども、やはり顔が見えることが大事なんじゃないか。現地に行かなきゃいけないんじゃないか、とい

う声があり始めたプログラムです。

特に最近では、防災教育は非常に重要視されております。みなさんたちの時代には余り習ってこなかったかもしれませんが、現在は高等学校の地理 A で、防災は約相当量のページ数を占めております。2022 年度からは高校で地理総合が必修になりますが、さらに増えていくことも予想されています。

東日本大震災は非常に大きな災害でした。特に大きかったのは津波被害なのかなということです。10メートルを超えるような大きな津波被害を受けた地域もありますが、その中でどこかで活動したいということを学生と考えてきました。そこで復興庁の方と相談して、岩手県釜石市に入ることにしました。釜石は、ご承知の方もいると思いますが、JR 釜石線というものですが非常に早い段階で復旧しましたので、鉄道でここまで行けるということもあり始めた場所です。

釜石という場所は観光という点でも非常に重要です。近代製鉄の発祥の地ということで、大島高任という人物が日本で最初に西洋式の製鉄業を始めた場所で、かつ日本最初の官営製鉄所もこの場所で 2016 年にはこれらの場所が世界文化遺産登録をされています。それから新日鉄釜石、これはラグビーの町としてもよく知られていますし、ことしもラグビーのワールドカップがここでも行われますが、ラグビーつながりで、新日鉄釜石と同志社というのはつながりが深い。最初、私たちが行くと、同志社女子大学から来ていると言ったら、私たちの敵じゃないかと冗談半分に言われました。最初から溶け込みやすかった場所です。



写真 13

これは中心部です。青葉公園通りです。この左は私がいつも泊まっていたホテルですけれども、1階は突き抜けて、車が突っ込んでいます。どうにかしてこういうところで活動できないか。私も非常に困りまして、私がか

ういうのを専門でやっているといいんですけども、今まで申し上げたように京都のことが基本的に中心的なテーマですし、北海道の富良野にも足しげく通っております。それらの仕事と同時並行でするのはかなり難しいということを感じましたので、周辺の大学とアライアンスを組みました。



写真 14



写真 15

これは私がつけた名前ではありませんが、関西 MyDo girls という名前をつけさせていただきました。これは甲南女子大学と奈良女子大学と京都女子大学と組んだ組織です。何か協定を結んだわけではございませんが、たまたま専門分野が近い教員間のつながりでやろうということで、女子大学生が被災地で何ができるのかということについてやったということです。学生数では本学がほとんどでした。5~7月と学生たちと下見や事前学習をして、地域の方々とニーズを調査した上で、仮設商店街を中心として活動を行いました。例えば遺体捜索とか瓦礫撤去ということはなかなか難しいので、いろんなイベントごとを行ったり、仮設住宅に訪問したり、そういっ

たことを通してこういう活動を行おうというのが中心的な狙いなのかなと思います。



写真 16

この写真 16 は片倉さんという地域の商店街の会長さんですけれども、こういった方々や地域の方と交流し、また幼稚園生の子もたちと一緒に遊んでいくという活動を行ってきました。目に見えない活動ですし、これは富良野と違って、新聞等で広報してもらおうようなものではないので、地道な活動を続けてきたというところがございます。これも学生主体でプログラムを組んでいるのが特徴なのかなと思っています。



写真 17

この写真 17 は釜石市役所との共催でどのようなまちづくりがいいのか、とりわけ私たちは関西から来ておりますので、阪神・淡路大震災を経験しております。そういった方々も一緒に来ていただきまして、これからの震災復興のまちづくりをどうしていけばいいのかということについて、パネルディスカッションなども活発に行ってきました。一緒に考えていく。学生はこういうものを通して非常に成長していきます。これは実は 1 年生とか 2 年生が主体です。1, 2 年生でこういうような形で市の

職員たちと一緒に、何が今この地域で求められているのか、どういうふうなことで防災計画をつくらばいいのか。もちろん専門知識があるわけじゃありませんが、真剣に向き合う姿勢、逆にこういうことで大きな問題があるということを知って、大学に戻ってそれに関する授業を受ける。反転型の学習の一つのきっかけになればということで行いました。これも一つのモデルケースなのかなと思います。



写真 18

また、それを踏まえて関西でもその現状を発信しているということで、写真 18 は大阪の梅田にある梅田スカイビルの上でのものです。ここで毎年 3 月 11 日に 3.11 FROM KANSAI というイベントを行っています。今はかなり規模が小さくなりましたが、ここで学んできたことや課題などを学生からプレゼンしています。これは循環させているということです。こういうので、今まで 8 年ほど活動を行ってまいりました。

近年では、岩手県から少し南のほうに地域をずらしております。これは関上というところですが、仙台空港のすぐ横に名取市がございますが、岩手県にずっと行っていて気づいたのは、地域間格差が非常に激しい。岩手県沿岸部は比較的復興が進んでいるところですが、進んでいないのが南側です。特に福島県は言うまでもありません。さまざまな形での風評被害もありますが、近年では宮城県の名取市には定期的に行っており、仮設住宅で高齢者の方々と対話する。傾聴の会というものをやってきました。

しかし、この仮設住宅もこの 3 月で閉鎖になりました。どんどん被災地の姿が変わっています。姿が変わっていますし、そこで新しいまちづくりの課題というものも生まれている。7 年、8 年やっていると、ずっと会う学生はいません。学生は当然ながら変わっていきます。

実は変わらないのは私だけですが、学生は相互に経験値がうまく継承できているかという大きな課題があります。地域も変わる、学生も変わる、意識も変わります。最初のころの学生は、学生は寝袋を持っていきました。体育館の片隅に寝させていただくというか、被災者たちの迷惑にならないような形で寝させていただきながらやっていました。今の学生さんに寝袋を持って行って体育館の横で寝て調査するかというと、そんな無理だと思えます。当初の学生は現状を見ていますので。しかし、7年、8年たつと、まちは一見穏やかに見えますが、課題は内包されています。そういう中でどのように活動し地域と連携していくのか、非常に大きな課題があります。

さらに、こうした取り組みを発信していかなければならないということで、毎年3月ごろに大学コンソーシアムで行われているFDフォーラムがあります。今日来ている学生にも今年度の3月に立命館大学で行われましたFDフォーラムで発表してもらった学生がいますので、コメントをいただければと思います。

東 FDフォーラムではさまざまな分野の教授の方や専門家の方が来て発表をするんですけども、私は先ほどの富良野のインターンシップとこの被災地について報告しました。さまざまな分野の専門家の方の意見を聞いて、今後のプログラムをどう進めていくかなど、課題が新たに見えだしたなと感じました。

天野 ありがとうございます。実際FDフォーラムなどに行くと、いろんな大学の方がおられますし、FDフォーラム以外にも大阪歴史博物館で年1回やらせていただいています同志社女子大学大阪公開講座でもパネル発表しており、実際に被災した方々で関西のほうに避難しているとか、縁があるという方々の貴重なご意見もいろいろいただきます。そういった言葉を学生が受けとめ、今後の学習に生かしていけるのかなと思っています。

現代社会学部社会システム学科では、中学校の社会科学、高等学校の地歴・公民の免許を取得できますが、これに関わる学生の多くが教職課程をとっていました。どの教科を通して「生きる力」というのがキーワードになっています。若い人々がこれからの社会をどのように生きていくのか。もちろんこれは経済的な側面もあろうかと思えます。心の問題もあろうかと思えますが、差し迫ったこういう災害からどのように自分たちの身を守っていくのか、そして地域社会を復興させていくのか、これは大きな課題であろうと思っています。

4. おわりに～これからの地域連携型学習の課題～

このようにお話をしてきた地域連携型の教育プログラムですが、多くの課題があります。まず1つは学生相互の学年間の情報の共有が非常に難しいということが挙げられます。経験の継承です。どうしても大学の教育システムでいうと、4年間とはいえ、実際にゼミに入るのは3年生、4年生、ここは何とか繋がりますが他の学年との継承がうまくいかないことがあります。フィールドワークとか地域連携というのは、地域の人々との目に見えないつながりというのをいかにつくるか、というのがキーワードです。繋がりをどう考えていくのかということです。これはお越しの先生方にもアドバイスをいただきたいところでございます。私自身も未熟だなと感じているところです。

2点目は、教員側の継続性の問題です。富良野は10年間以上、被災地のほうは8年ぐらいいかやっておりますが、継続的にやっているプログラムです。しかし、私自身と大学側の持続性がどこまで持てるのかということです。実際ずっと先まで向き合えるのかということと正直、不安な面もあります。体力的な問題、予算上の制約もあります。私がこのプログラムを始めたときはまだ30代でしたので、何とかできると思っていましたが、40歳を超えていきますと、本当に続けていくことができるのか。研究と教育と学問をどうバランスをとるのか。実はこれは教員を単に交代すればいいじゃないかということではなく、またゼロから始めなければならない。教員だけでも地域と繋がっておかないと授業展開はできない。

もう一つ、地域連携というのは今、非常に重視されています。特に京都市はこれを重視しており、同志社女子大学でも学まち連携推進事業ということで、京町家のプログラムで採択されています。現在、補助金をいただいている状況でございます。しかし、そういった地域連携、京都市はすごく重視しておりますが、地域への目に見えるメリットの提供が本当に可能なかということです。学生は学びを深めていますけれども、本当にこれが地域の人の役に立っているのかなということに不安感がないわけではありません。地域に対する継続的なメリットがないと、やはり地域連携というのはできないと思います。

どういふふうにしていけばいいのかということですが、答えはないと思います。まず1つは、学生さんが主体になって活動していくことが大事だろうと思っています。

す。学生との交流、提言、活動への参画で初めて実現するようなプログラムではないか。これは当たり前のお話ですけれども、これが大事だろうと思っています。失敗させるということも大事なと思っています。失敗したって大したことはない。学生を信じていくということも大切なんじゃないかなと思っています。そういうことで成長していこう。地域に放り込むということですね。どうしても私たちは学生をカバーしてしまいがちな部分がありますので、野に放ってもいいんじゃないか。

さらに変化する地域のニーズがあります。先ほどの被災地もそうです。被災地は非常に目まぐるしいのでわかりやすいのですが、北海道の富良野も同じです。実は北海道の富良野は、人口2万人の中で200万人以上の観光客が来ております。一見活性化しているように見えますが、若い人たちがどんどん流出しています。高齢化率は高い地域です。そういった中で、一見活性化している地域にも課題が多い。実はこれは京都の中心部もそうじゃないかなと思っています。年間6,000万人の観光客が来ている。じゃあすごくにぎやかで交流が深まっているかというと、実は乖離している部分があると思います。京都の中心部の高齢者の方々のコミュニティと観光客が一体となっているというのは余り聞いたことがない。そう考えていくと、地域のニーズはいろいろ変化しているのだけれども、それに対応していかなければいけないのではないかな。

こうした諸問題に対峙する時には、やはり大学の持つ総合的な力が問われているように感じています。もちろん教員個人というレベルもありますが、私たちの大学は総合大学でございます。私は単なる地理学だけの専門でございますけれども、もっと横の連携、例えば社会システム学科におきましても、法律であるとか、心理であるとか、福祉であるとか、いろんな分野がございますし、あるいは学科レベルの枠を越えて、こういった地域に協働で取り組んでいくということもあっていいのではないかなというふうに思っています。これは被災地においても、北海道の富良野においても同様です。とりわけ生活科学部のほうではまちづくりということ、あるいはフィールドワークということ、そういうところに注力されている先生方もたくさんおられますので、そういったところとの情報交換、連携というものは今後は考えていけるのかなと個人的には考えているところです。

これからの社会を考えていくと、やはり主役は若い人々です。特にこの富良野地域が私の関心事の中では結構大きなウエートを占めているんですけども、この

主役は高校生なんですね。高校生が在学3年間の中でどんなふうに関与できるのか、それに同志社女子大学の学生がどう関われるのかというのがキーワードになっています。富良野オムカレーと一緒に学んでいる富良野緑峰高校は女子校ではなく共学です。女子は少ないはずですが、この活動をする子はほぼ全て女子高校生です。男子高校生の姿をほとんど見かけません。私たちは幸い女子大学の学生、女子高校生、交流を進めやすい。そういうところで私たちの大学の学生の力というものがいかに発揮できているのではないかと個人的には思います。そういった高校生や大学生のしなやかな視点、これがこれからのまちづくりに生かしていけるのではないかなということをお願いしています。いただいている時間内で何とかお話をしようということで進めてまいりましたが、ここで私のほうからの報告を終わらせていただければと思います。ご清聴どうもありがとうございます。(拍手)

【質疑応答】

質問1 富良野オムカレーの活動に男子学生はなかなか入ってきてくれないんですか。

天野 私は高校の教員ではないのでよくわからないのですが、担当の先生の発言です。私の総合的な見地ではないですが、男子高校生はおとなしくて、ちょっと静かで、奥手で、女子高校生は賑やかで、リーダーシップがとる子が多いと伺っています。

もう一つの理由は、この高校が、富良野高校もそうですが、実業科を含んでいます。男子はどちらかというと工業科です。農業科は女子高校生のほうが多い。それも要因かなと思います。

質問2 村瀬です。

多方面のお話をお聞きしたので、どういうふうにお聞きをしたらいいのかわからないんですけども、富良野の地域連携というか、富良野という地域はテレビとか何とかで有名になっている部分があって連携しやすいのがありますよね。先生が行かれているような活動をされているんですけども、それとまた釜石の話はタイプが違いますよね。先生の頭の中でそれぞれが抱えている課題がたくさんありますね。先生は若いし、活動的だと思っているけれども、きょうのお話を聞いていると、ちょっと体力的にも40を回るとおっしゃっていると、そうでありながら、また京都案内で来週テレビに出られるでしょう。そんなすごい課題を抱えている地域を回りながら、京都の歴史の話もテレビでやりながらというときの先生の頭の中の切りかえというのはどういふ

うにされているんですか。釜石だけでもすごい震災で大変で、ちゃんと向き合うとすごい大変なのに、学生さんに発表してもらったり、いろんなところで発表を考える、それも先生の頭の中で考えなあかんということですよ。どういうふうにされているんだろうというのがちょっとお聞きしたかったんです。

天野 私自身はこの3つの地域は連動していると思っています。後づけの部分もあるんですけども、まず1つ、私自身が地理学の専門だということがあるのかもしれないです。地理学というのは地域としてどうかかわってくるのかということを見ていますので、それが富良野の場合は一見成功しているように見えるんですけども、中に課題がある。でも観光というのはすごく大きい。釜石とか被災地の場合は、全ての被災地がそれに当てはまるわけではございませんが、観光というキーワードが地域振興については手っ取り早いんですね。雇用を生み出しやすいという点です。復興のキーワードに観光が使えるんじゃないかということを念頭にしながらやっています。

京都も有数の観光地域ですが、実際にはさまざまな課題があります。高齢化の問題、町家をどう考えるのか、あるいは観光客ばかりでオーバーツーリズムといわれるような公害的な問題もあります。こういった問題は実は相互にどちらにも課題がある。それらを相互交換的に補えるんじゃないか。例えば北海道の富良野地域で行われているプログラムは実は京都でもできるのではないかと。北海道の富良野では十分ご紹介できなかったんですけども、高校生しかいませんので、中・高と高齢者が結びついているんなプログラムをつくっている。翻って、大学の町といわれている京都で、地域の人と大学生がどれだけ交流しているか。多分十分おこなわれてはいないのではないかと、と思います。こういうものを取り入れていけるんじゃないかということで、お互いに共鳴できるような部分があるのではないかと思います。

質問2 だから、うまいことしていますよという線と、なかなかうまくいかないんですよという線があって、富良野にもうまくいかない部分、京都にもうまくいかない部分があって、それは課題としては同じものがあるのではないかとということですね。

天野 そうですね。

質問2 さっきの釜石は観光のほうに入るんですか。

天野 釜石のお話は、復興初期の取り組みです。その後は、宮城県と福島県のほうでさせていただいているというのが実態です。そちらのほうでは、とにかく人に来

ていただかなければいけない。被災地域に関心を持っていただかなければいけないというときには、形はどうであれ、観光というのがキーワードになるんじゃないか。とりあえず来てもらって、安全であるとか、実際にどのぐらい復興しているのか見ていただきながら、理解を深めていただく第一歩になればということで進めております。

質問3 なかなか有意義なお話をありがとうございます。質問するつもりはなかったんですけど、マイクを渡されたので。

私が学長のときに城崎から富良野に移すという話が出てきて、富田さんに来てもらって、うちと何ができるんだろうという議論をいろいろさせてもらったので、懐かしく聞いていたんですけども。さっき学科を越えて、学部を越えてという話があったと思うんですけども、実は薬学部の薬草園にラベンダー畑があるんですが、学生さんはご存じでしょうか。今、それが一体どうなっているのかというのが気になるんです。これは薬学部と富良野のつながりということで一つ考えて、あわよくば同女ブランドのラベンダー香水をつくれなかなみたいなことを言っていたんです。もうけるじゃなくて、経験を含めてとか、そのつながりを含めてということがあったんですけども、そんな話もあったんですが、どうなっていますか。

天野 ありがとうございます。まず薬草園のラベンダーはまだ使っております。ラベンダーは大体10年ぐらいが限度だそうでございます、今ちょっとお話しにありましたが、ファーム富田、先ほどの畑を維持していたファーム富田の先代の社長ですが、富田忠雄さんが来られて、先生と一緒にあそこに植えられたということは聞いております。あと8号館の横にも植わっておりますが、10年たちましたが、ずっと継続的に刈り取りをしております。参加する学生が事前にラベンダー畑で刈り取りをしているという状況です。

香水の開発に関してなんですけれども、先生にもご説明するまでもないんですけども、当初はファーム富田と協定を結んだと思うんです。連携協定を結んで、いわゆる企業型インターンシップの形で始めた記憶しております。ただ、そのときと体制が変わりまして、富田忠雄さんという方がお亡くなりになられまして、ファーム富田、ラベンダーとのつながりが中心ではなくなってきていますので、幅広く多様な地域の諸課題に目を向けているというのが実情なんです。ただ、おっしゃっていたように、ラベンダーの香水をつくるというの

は薬剤師免許が要るので、薬学部があって初めてできることかもしれないとか、それ以外にいろんな商品開発、食べ物も含めてやっているんです。ラベンダーコーヒーとか、ラベンダーティーとか、ラベンダーソフトクリームとか、いろいろ商品開発もしております。多方面な形で実は連携可能なのかなと思っているんです。

質問4 最後に、天野先生でなくて、せっかく4人主力選手が来ていただいているので、天野先生が聞こえないという前提で、多分卒論とかとリンクさせて今のようなことをやられていると思うんですけども、4人それぞれの方に最後にお伺いしたいんですけども、大変と違いますか。

山加 私は大丈夫です。

東 私もほとんどプログラムを先生が立ててくださっていて、そこで一緒にプログラム授業としていっているので、内容は全然大変じゃなくて、むしろ事前学習、富良野のことについて学べるので、ある程度知識も入れて現地に行くので、教えていただいたことが、現実見てこういうことなんだなというふうにわかりやすいので、大変というよりは、楽しんで現地調査ができているなと感じています。

武元 大変と思ったことはないです。私はプロジェクト演習で富良野に行ったときは2年生だったんですけども、プロジェクト演習は私が2年生のときに初めて開

講された授業だったので、どういうプロジェクトなのかなというよりは、富良野ってどういうところなんだろう、北海道へ行ってみたいなというだけで参加したら、それ以上に学ぶことが多かったので、こうやって報告会を開いて、いろんな人にこういうことをしたよという報告をすると、すごいそんなことまで、大変だなと思うかもしれないですけど、実際動いている身としては、そんなことはなかったです。

三島 私も本当に大変じゃないと友達とかから言われたりもあったんですけど、行ってみると、本当に楽しかったですし、唯一で言うと、最終日に発表があったので、毎日チームに分かれて、私は6人いたチームだったんですけど、今まで学校で自分の机上だけの勉強だったんですけど、初めてその6人で毎日ミーティングを重ねるというのは大変ではあったかなとも思うんですけど、方向性とかが難しくなって難航したときは、すぐに天野先生が近くにいらっしゃったので、たくさんアドバイスをいただいはまたミーティングをしてとなって、私個人としてはそういう自分なりの考えを持つであったり、仲間と共有するという力は、卒業論文の研究であったり、自分としては就職活動とか、キャリアを考えるときにも役に立ったな、いい経験ができたなと思っています。